山口大学ワンダーフォーゲル部 OB 会
2003 年 OB 通信第二号

通巻第 29 号

2003 年 12 月発行

目次

第 1 章　OB 会の活動 1
1.1　気楽に交流を —再任ご挨拶— 1
1.2　新生 OB 会の経緯と総括（そして今後） 1
1.3　OB 総会・懇親会 in 山口 2
1.3.1　OB 総会に参加して 3
1.3.2　東鳳翩山登山と OB 総会に参加して 4
1.4　東京支部の「熊・亀」活動報告 4
1.5　2002 年会計報告 5
1.6　OB 会費納入について 5
1.7　OB 総会での寄付金について 6

第 2 章　現役部員近況報告 — 本部編 — 7
2.1　執行部近況報告 7
2.2　夏合宿結果報告 7
2.2.1　植本 Party（山域：甲斐駒・仙丈・白峰三山） 7
2.2.2　後藤 Party（山域：南アルプス白峰三山） 9
2.3　アフター・一年生合宿結果報告 11
2.3.1　アフター（山域：白馬岳） 11
2.3.2　一年生合宿（山域：美ヶ原） 12
2.4　春合宿コース紹介 13
2.4.1　霧島・九重 Party 13
2.4.2　西表島 Party 14

第 3 章　現役部員近況報告 —工学部編— 15
3.1　近況報告 15
3.2　夏合宿結果報告 15
3.3　80 Km 耐久徒歩について 15
3.4　春合宿コース紹介 15

第 4 章　近時辺々 17
4.1　列島最南端紀行 — 木山克彦（S.42 年卒）— 17
4.2　祖母山登山 — sakima（H.13 年卒）— 20

その他 23

第 1 章

OB 会の活動

1.1 気楽に交流を —再任ご挨拶—

会長：末國弘司

会員諸氏におかれましては恙無く新年をお迎えのことと、お喜び申し上げます。

2003 年の OB 総会には 89 人というかつてない多数の出席をいただき、感謝いたしております。この勢いを、次回以降にも継続していきたいものと、改めて心引き締まる思いでおります。

私事になりますが、急病を得て緊急入院という事態になり責務を果たせなかったばかりか、会員諸氏とも交歓する機会を失ったのはかえすがえすも残念なことでした。会長不在の総会となりましたことを、改めてお詫び申し上げます。

総会には任期満了に伴う役員人事案件を提出いたしましたが、木山副会長ともども再度任に当たれとの総意と承り、体調回復の兆しも見えたことから、お受けすることにいたしました。

OB 会の組織建て直しを迫られ、新しい形での OB 会を発足させ今に至った経緯と今後の方向については、木山副会長の報告にある通りです。OB の中には種々の意見があることは、承知しております。現在のシステムが最良とは思っていませんが、運営していきながら欠点を改良できればと考えています。OB 諸氏の活発なご意見に期待するところです。

次回、2004 年の総会は福岡で開くことになりました。総会開催をもって直ちに九州支部が結成できるわけではありませんが、九州在住 OB 諸氏の多数のご参加を得て、会員間の交流が活発化する一助になればと、期待しております。総会開催の意義の一つは、会員が集う機会の創出にあります。支部結成とは切り離して総会の開催だけでも、順次全国各地でできればと考えています。総会を各地で開くことにより会員諸氏の参加を容易にし、ひいては会員間の世代を超えた交流が促進できればよいと思う次第です。

気楽に声を掛け合い会員の交流を活発化すること、新しい年の目標の一つに掲げたいと思います。

1.2 新生 OB 会の経緯と総括（そして今後）

副会長：木山克彦

今年も押し迫って参りましたが、OB 会員の皆様には恙無くお過ごしの事とお慶び申し上げます。

さて、OB 会は色々な問題を抱えながら推移してきた訳ですが、今日まで取り組んで参りました課題も漸く一区切り付いた時期でもあり、先の総会でもご報告させて頂きましたが、この機会に紙面をお借りして経緯と総括、今後の方向について触れさせて頂きます。

既に、皆さんもご承知のように、W.V.OB 会の運営上の理由から、再編成の必要性が出ておりました。約二年に亘って OB 会への入会意思と会費納入について確認を進めて参りました結果、会員数は約 250 名の多くに至っております。同時に絶大なる賛同を得て工学部 OB 会も統合され、さらには支部結成の課題にも取り組んで参りました。

去る 10 月 11 日再編成後初めての OB 総会、懇親会を催す運びと成りましたが、北は埼玉、南は宮崎と、全国通津浦浦より多くの方がたの御参集をいただき、現役を含めて 120 名もの出席者の元、盛会裏に終了いたしました事を謹んでご報告させて頂きます。新しく生れ変わった OB 会が大きく第一歩を踏み出した記念すべき日でありました。

昨秋には東京支部も結成され、此れを記念し総会を東京で開催する事も出来ました。新生 OB 会は着実に所期の目的を達成しつつあります。会員は今や全国に居住していますし、出たくとも距離的、時間的、（経済的）な制約から総会、懇親会に出られない人も多く、何時も山口での開催では公平さを欠くことにもなり、今後は活動の中心を支部に移す事になるでしょう。

より充実した OB 会へと発展させるには、各地での自主的な支部活動がその中心にならざるを得ないでしょう。各地での支部結成を大いに期待する所ですし、此れ

に連動して総会開催地を巡回型に出来れば、遠方の OB 会員が身近な会として参加の機会が得られます。日常生活の身近な所からネットワークを構築され、積極的に支部の立上げ、運営に拘わって頂ければ、と希望いたします。

OB 会はその性格上、会員一人、一人の意思無くして存在致しませんので、今後とも会員の力強いご協力を戴ければ、と希うものであります。

図 1.1: 受付けはこちら

1.3　OB 総会・懇親会 in 山口

世話人代表：山本充二

2003 年 10 月 11 日（土）、山口市湯田の「防長苑」において「2003 年度 YUWV OB 総会・懇親会」が開催されました。OB 総会には全国各地から OB 89 名が出席し、続く懇親会には、現役部員 15 名も加わり、賑やかな交流会となりました。

また、当日昼間は総会に先立って、現役との合同で 52 名が東方翺山への記念山行を行いました。総会・懇親会・山行の参加者は別紙をご覧ください。

■ＯＢ総会 17:00〜17:45 **〈出席** OB 89 **名〉**

1.OB 会長挨拶：副会長 木山克彦氏

2. 議事：

- **経過報告**
  木山副会長から、これまでの活動の経過報告（OB 会名簿の整理、会則の制定、OB 通信の発行、東京支部の設立等）が行われました。
- **会計報告・監査報告**
  2002 年度の会計について監査の報告がなされ、承認されました。
- **今後の活動方針等**
  木山副会長から、2004 年度の活動方針案として、OB 通信の発行（年 2 回）、支部の立ち上げ推進、OB 会員名簿の作成、現役への装備補充の検討、ホームページの充実が示され、了承されました。
- **・役員改選**
  会長には末国弘司氏、副会長には木山克彦氏が、それぞれ再任されました。
- **・次期総会の開催地**
  2004 年度の総会は、九州地域での開催が決定しました。

■懇親会 17:45〜20:30 **〈出席** OB 89 **名・現役部員** 15 **名〉**

最遠来の藤川信一氏（埼玉県）の音頭で乾杯し、現役部員による「ごはんの歌」で飲食を開始。現役活動報告

図 1.2: 報告します

の後、会員の近況報告では、20 代〜60 代の各世代別に、一人 3 分スピーチで日頃の活動ぶりが紹介され、おしどり会員への突撃インタビューや「私の今」と題する写真コンテストもありました。

また、当日のアンケートでは、会員の半数以上が体力や年齢に合わせた山登りを続けていることや、山で培った料理の腕を今も家庭で振るっている事などが判明。会場の日本百名山の地図に印された出席会員の踏跡（81 山に登頂）を見ては、「みんな、よう登っちょるのう」との声も。

終盤は、この日のために編集された「歌集」を手に、円陣肩を組み、世話人・宴会部長の古谷真之助氏の独演的リードで、なつかしの愛唱歌を歌い、東京支部の木村均氏　の万歳で中締め（後は、大挙して 2 次会へ）となりました。

今回は、卒業以来、中には 30 数年ぶりの顔合わせという人も多く、久々の再会に話が弾み、飲んで歌っての旧交を温める光景が、ホテルの門限過ぎまで続きました。なお、懇親会では、会員スピーチで現役部員の装備に対する支援の呼びかけに、多額のカンパが寄せられるという思わぬ成果（？）もありました。

■記念山行 11:00〜16:00 **〈参加** OB 37 **名・現役部員** 15 **名〉**

集合場所の山口駅、11 時になると、ザックを肩にそれらしい連中が集まってきました。が、なかなか見分けが

図 1.3: 賑やかに

図 1.4: 肩を組み

つかず、恐る恐る名前を尋ね、「俺だよ、俺」と言われてようやく気づいたり、お互いの近況を尋ねあったりと、駅前は早くも同窓会ムード。

参加者が揃ったところで、今回の山行コースの説明。夏の OB 通信で案内していたコースを、事前の下見（実は、これで世話人がヘバッタ！）の結果、大きく変えてい　たのです。眺望を十分楽しめ、体力に合わせた選択ができ、かつ、配車もできるよう、世話人・山行隊長の田村伊正氏が思案を巡らし設定したコース

> 総会会場の「防長苑」に不要な車を置き、配車で地蔵峠へ、そこから皆で東方翩山に登り、昼食。下山は、地蔵峠へのUターン組、坂堂峠へのアップ・ダウン組、二つ堂へのジグザグ・ダウン　組と別れ、各下山口からは配車で「防長苑」に戻る

です。

さて、地蔵峠を出発。好天に恵まれ、現役当時の錬成の思い出話などしながら、秋色深まる山路を三々五々と東方翩山へ。頂上直下の草原では、先に登った現役部員が我々のために、具沢山のカレーライスを作って待っていてくれました。これぞ正調と　いう「ごはんの歌」の儀式を挙げ、昼食。差し入れの一升瓶をあっという間に空けた相変わらぬ強者もいました。

ススキの穂が秋の日差しに揺れ、眼下には山口盆地が

図 1.5: 二次会でも

静かに佇み、遠くには山口湾がキラキラと輝いていました。山頂では持参した横断幕をバックに全員で記念写真、同期の仲間同士でのスナップも。14 時 30 分、各自お気に入りの下山コースの途へ。16 時前後には全員「防長苑」に帰り着き、温泉にどっぷり浸かって、夜の総会・懇親会に備えたのでした。

1.3.1　OB 総会に参加して

1984 年 3 月卒（本部 22 期）：野村浩之

会費も滞納し、音信不通に近い状態であった私は、参加を迷いながらも、結局、小さくなって（体は相変らずデカイ・・・）総会に出席した訳ですが、おおらかな会の雰囲気に助けられ、実に楽しく充実した時間を過ごさせていただくことができました。

思いがけず懐かしい歌が沢山載った歌集が配られるなど、事前準備も進行も素晴らしく、世話人の方々の熱い想いが伝わってくる温かい会でした。本当にありがとうございました。

卒業以来いつの間にか疎遠になっておられる皆さん、たまには「旅鳥」や「大山讃歌」「新人哀歌」などを、気を遣わなくていい仲間と共に、大声で歌い散らかすのはいいものですよ。校歌などとはちょっと違う、何と言いますか、身体が覚えているような、泥臭いような、妙

図 1.6: くつろいで

図 1.7: いざ、山頂へ

図 1.8: みんな入って

な感覚とともに、ムクムクと元気が湧いてきますよ。ぜひ、「無理のない範囲で少し無理をして」次回の会に参加されることをお勧めします。

そして、OB 会から自然退会状態となっている私のような不心得者にも、各卒業年度ごとに少しずつ手分けするなどして、ときどき一声掛けることができる組織であれば素晴らしいかなと思います。

1.3.2　東鳳翩山登山と OB 総会に参加して

1994 年 3 月卒（本部 32 期）：木村仁志

同期の原君に東鳳翩山に登ろうと誘われ山口駅に来た。集合時間の 11 時になると多くの OB といつものユニフォームを着た現役部員合わせて 40 人ほどが集まった。車に分乗して地蔵峠に行く。現役部員や原君と一緒に登ったが、あまりしんどい思いをせずに約 30 分で東鳳翩山の肩に到着してしまった。ただこれは東鳳翩山に一番楽に登山できる地蔵峠からのコースを選んでいただいたためで、私が現役の時苦労した二堂からだったらかなりしんどかっただろうなと思った。

東鳳翩山の肩では現役部員からなつかしのワンゲルカレーとコーヒーをおいしくいただいた。現役部員はこれらの料理をつくるために二堂から登山してきたとのことで、頭が下がる思いがする。食後頂上に登り、記念撮影を行ったり昔なつかしい眺めを楽しんだりした。東鳳翩山周辺は私が現役の時に比べ緑が多くなっているようだった。

下山後は防長苑で約 90 人が参加して OB 総会が開催された。私が現役の時の OB 総会は太陽堂旅館に数人の OB が参加して開催される小規模なものだったので大きく発展したと思う。ボードに掲げてあった数々の昔の写真や日本百名山・世界の山の登山状況を見ていると先輩方の活躍ぶりには驚くばかりである。OB 総会には私と同じ広島出身の OB や私が現役の時にお世話になった方が多数来られており、楽しいひとときを過ごすことができた。

OB 総会は予定された時間を超えて盛り上がり最後に大きな円陣を組んで旅鳥とワンダーフォーゲルの歌を斉唱。現役部員も OB も歌えるこれらの歌を歌っているときワンダーフォーゲル部に入部して良かったと改めて思った。

最後に今回の東鳳翩山登山と OB 総会を開催にするにあたり、スタッフとして運営にあたった現役部員ならびに OB の皆様に厚く御礼申しあげます。ありがとうございました。

1.4　東京支部の「熊・亀」活動報告

東京支部事務局：木村均

■はじめに　昨（2002）年 10 月本部総会の東京開催と合わせて、東京支部が設立されました。爾後発刊された OB 会報への武富支部会長からの挨拶文中に、OB の幅広い年齢層の纏めかた＝年代層ごとに幹事を設置していくチェーン方式、支部運営の基本的な検討は役員 3 名でボチボチやって行く、との表現が著されて丁度一年経ちました。意気込んで支部が立ち上げられたものの、ボチボチやって行く事だけは着実に守られているようで…。

熊さん・亀さんのようにのっそり、ゆっくりとした東京支部の一年を、私個人の所感を交えて報告致します。

■おこなった事　トリンケンと、なんとかワンデリングと言える程度の山行きを、年に 2 回ずつ行うのが支部設立前から東京地区の基本パターンです。どういう訳か、山行きと温泉がセットになりつつあります。

この一年もご多分に漏れず、幹事（事務局長）のまじめな性格を顕わして？基本線を忠実に守り、飲み会、山行きを 2 回ずつ実施（予定含む）しています。因みに概要は以下の通りです。

2003 年 2 月 5 日＝飲み会： 熊さん亀さんのスゴーク遅い新年会（15 名）。東京でも安上がりの飲み処はありまして、飲み放題付三千円ポッキリで効率良く酔わせ

て頂いています。

2003 年 4 月 19 日＝山行き： 東京都・神奈川県境の陣馬山 857m。そのまま下りて麓の温泉に入り、猪鍋(ししなべ)をつついた者 5 名。現役時代の力を遺憾無く発揮し、遠く高尾山（注；高尾山は支部設立総会の翌日、皆で登った山です）まで踏破せる者 1 名、の 6 名の参加に終わりました。因みにエントリーは 12 名でしたが、急用で急遽参加不能になった方が多い時でした。ところで、当日参加出来なかった人から、後日同じルート（温泉共）に行って満足して来た旨を 9 月の飲み会で聞いた時は、場所設定を行った幹事として嬉しく感じた次第です。

2003 年 9 月 30 日＝飲み会： 超遅い暑気払（目茶早目の忘年会？）。14 名がエントリーしましたが、出欠予定の出入りが激しく最後は 10 名。中間期決算関係で多忙なため参加断念多く、幹事も開催期日設定ミスを強く感じた次第です。

2003 年 11 月 15 日（土）＝予定山行き： 箱根の旧鎌倉道（湯坂道?ピークは 843m の鷹巣山）歩きと下りてからの温泉付きのセットコース。今回も諸事多用な方、体力、体の故障などで不参加表明回答が多く、静かな山と湯の旅となりそうです。

■感じている事　今でもそうだと思いますが、小生の現役時代、WV 部はコンパクラブと言われていました。試験が始まると言っては試験突入コンパ、終わったと言っては試験打上げコンパ、9 月はお月見コンパ、3 人集まれば文殊の知恵コンパ（←これは嘘！）云々。

その流れを汲んでいるのか、飲み会へのエントリーはまずまずですが、参加者の平均年齢が高まるとともに、山行というより丘歩きが息切れ気味です。

一つには事務局の力不足で、若い世代＝４０歳近傍以下の恒常的参加をみるまでに幅を広げるのに今一つのところがあります。実際、トリンケンにおいても前回 S59 年卒の垣田さんまで、やっと広がりを持てるようになったところです。

横並びの年代のネットワークを横糸に、縦年代への縦糸を織り込む形で、蜘蛛の巣状までには行かないにしても、広がりを持ち自然に集まる東京支部の形成を念じています。

それぞれの横糸から、縦糸につなぐための世話役を選んで戴いて、少しずつ年代に幅を持った支部になれるよう、皆様の御協力をお願い致します。通常は横糸年代でそれぞれの動きを行い、１年か 2 年に一度世話役経由で縦糸をたどって、やや大きな催し（やはりトリンケンか？）が出来たらいいなあ、と思います。

■おわりに　感じていることに記しましように、これからも精々次の世代に責任を持って繋げるよう、微力ながら役員一同で熊・亀の歩みを続けようと考えています。

ここまで駄文をお読みいただいた貴方に、深く感謝の意をささげつつ報告に代えさせて頂きます。

1.5　2002 年会計報告

事務局

この会計報告は本来ならば第一号に掲載するべきでありましたが、事務局の不手際により洩れておりました。お詫び申し上げます。

2002 年内での収入、支出はつぎのようになっております。

収入	
郵便貯金の利子	48 円
2002 年分 OB 会費	379,000 円
計	379,048 円
支出	
事務局用ファイル等	470 円
OB 通信第一号関連費	176,665 円
東京 OB 総会関連費	318,244 円
OB 通信第二号関連費	82,077 円
計	577,456 円

支出 577,456 円から収入 379,000 円を引いた 198,408 円の不足分は（預り金ではない）OB 会費から賄いました。

また、2002 年度末での OB 会費残高はつぎのようになっています。

昨年繰越し	1,230,067 円
2002 年分 OB 会費	379,000 円
2002 年内に振り込まれた OB 会費（2003 年以降分）	141,000 円
2002 年不足分	-198,408 円
会費残高	1,172,659 円

この 1,172,659 円のうち 953,000 円は一括振り込みされた 2003 年以降の OB 会費預り金です。

1.6　OB 会費納入について

事務局

2004 年分 OB 会費を納入されてない方には郵便振込用紙を同封させていただいております。下記へ納入して下さりますようお願い申し上げます。

郵便局：01530-0-16050
山口大学ワンダーフォーゲル部

また、会費納入は 1 年分納入、5 年分一括納入のどちらかで御支払い下さりますようお願い申し上げます。

- **1 年分会費：** 2,000 円
  (夫婦会員は二人で 3,000 円)
- **5 年分一括納入：** 10,000 円
  (夫婦会員は二人で 15,000 円)

OB の皆様の払い込み年状況は別冊の『2003 年 OB 会会員名簿（第二版)』に記載いたしております。ご確認ください。

会費を口座に振り込んでくださる際、口座引き落としにされると当方に明細書は届くのですが、振り込まれた方の御名前が通知されず、当方で確認が取れません。払込用紙を使って振り込んでいただくと、その払込用紙のコピーが当方に届きます。御手数ですが必ず払込用紙を使って会費を納入して下さりますようお願い申し上げます。

1.7　OB 総会での寄付金について

事務局

10 月 11 日に行われた OB 懇談会の席で、多くの OB の方々から現役部員へのカンパが集まりました。寄付していただいた OB の皆様、どうもありがとうございました。寄付金総額は 68,000 円です。この寄付金は現役部員へ渡され、共同装備購入に充てられることになっております。

第 2 章

現役部員近況報告 — 本部編 —

2.1 執行部近況報告

本部第 43 期執行部主将：植本洋（三年）

今年から執行部が移動する時期を変え、例年 4 月交代だったのを正式に 1 月交代にしました。就職時期を考えてのことですが、春合宿の安対と新執行部承認部会という大きな行事がかぶってしまうの心配です。これで上手くいくのかどうか。次期の執行部の経験と判断を元にこのやり方でやっていった方がいいのか、従来通りがいいのか、考えて欲しいと思っている次第です。

現在、現役部員は 16 名。一年生 8 名、二年生 3 名、三年生 3 名、四年生 2 名で活動を行っています。まだ辞める者も無く、明るい雰囲気で活動を行えていると思います。夏合宿は後述の通りですが、夏合宿に参加できない者が 2 名いたのが残念です。しかし現在は、元気に活動を行っています。諸行事は夏合宿に向けてのものは、エスケープや中止する事が数回あって、忙しくはなりましたがクリアすることができました。

10 月の夏合宿打ち上げコンパは、OB との山行の日程がはっきりせず、あわただしく変更したことをお詫び申し上げます。清掃ワンデリングを予定していましたが OB との山行が加わり、数年に 1 回でいいのではないかという声もあり、取り止めました。

忘年ワンデリングは東鳳翩山で 1 泊 2 日で行い、それぞれ今年の出来事を忘れるくらい騒げたのではないでしょうか。僕らの執行部で行う主な行事は 12 月現在で既にありません。交代を待つばかりとなりましたが、最後まで気を引き締めて執行部としての活動を行っていきたいと思います。

2.2 夏合宿結果報告

2.2.1 植本 Party（山域：甲斐駒・仙丈・白峰三山）

PL：植本洋（三年）

今年 8 月 17〜25 日に南アルプスにて夏合宿を行いましたので報告します。今年は二つの Party に別れたのですが、両方とも南アルプスで、僕らの Party はピストンが多く、ロード歩きもあり、比較的、強度的には軽い行程でした。しかし、有名どころばかり行く贅沢なコースだったと思います。

■アプローチ AP（8.17〜18） 新幹線は、超満員で乗れないかと思うぐらいの混雑（もちろん長い間、立ってました）。それから、何時間も鈍行に揺られて、最後はタクシーで。夜ご飯も車の中で食べながら戸代口に着いた時には、夜 8 時くらいでした。

ああ、なにやらしんどいと思ったのですが、一つ大きなミスが…。夜ご飯にみんなが買ったコンビニ弁当の容器が、大量に。見回っても捨てるところは無く…。かわいそうにエッセンの周平が合宿最後まで持ち続けました。事あるごとに愚痴っていました。

次の日は、すぐに北沢長衛小屋に着きました。明日は甲斐駒だ！

■1 日目 (8.19)

	北沢長衛小屋	4:04 発
4:12	北沢峠	4:22 発
6:56	小仙丈岳	7:09 発
8:06	仙丈岳	8:19 発
8:35	仙丈小屋	9:14
9:42	馬の背ヒュッテ	9:58
10:12	藪沢の雪渓	10:22
11:54	大平山荘	11:58
12:23	北沢長衛小屋	
	計 13 本、5 時間 36 分	

この日は少し小雨が有り天候判断に迷いましたが、危険個所の甲斐駒は避けて同じくピストンの仙丈に行きました。シラビソの道は花々がとても綺麗です。

しかし、寒々として、尾根に出ても展望がガスで何もありません。それは、仙丈ピークでも同じで、あまりとどまらずに仙丈小屋に下り、沈にすれば良かったかなと思ったのですが、厚いガスの隙間から少し晴れ間が見え、風により、ガスが少し飛ばされて仙丈小屋からの尾

根の全容が最後に見ることができました。ガスのかかりが絶妙なのでとても神秘的な景観でした。

帰りは雪渓で少し遊んだりしながら、ガンガン下りました。皆、明日は晴れてほしいと願ったことだと思います。

■二日目（8.20）

	北沢長衛小屋	3:58 発
4:27	仙水小屋	4:41 発
5:10	仙水峠	5:28 発
6:45	駒津峰	6:58 発
8:40	摩利支天	8:56 発
9:40	甲斐駒ガ岳	10:33 発
11:23	駒津峰	11:35 発
12:03	双児山	12:16 発
13:14	北沢峠	13:30 発
13:37	北沢長衛小屋	
	計 12 本、6 時間 26 分	

天気は曇り。真っ暗な中、甲斐駒を目指しました。仙水小屋も過ぎてようやく明るくなってくると、ゴーロ地帯に突入。突然、ぬっと甲斐駒が現れました。灰色の山肌にガスをまとった雄々しい姿に皆驚きました。

さらに仙水峠に着くと、ややパニック。朝焼けがとても素晴らしく、皆写真を撮りまくりました。落ち着いてからすこし休ませて、急登をガツガツ進みました。

駒津峰についてからは雲が無くなり、前方の甲斐駒は急峻で、みんな少しびびったのではないでしょうか。細く切り立った道が続き、神経を削りましたが、無事登頂できました。

仙丈、北岳や富士の眺めが素晴らしかったです。ただ、摩利支天へのルートを間違えてしまい、皆に怖い思いをさせてしまいました。軽率な判断で反省すべき点です。

帰りはまたガンガン下りました。何はともあれ今日は満喫できたのでは。

■三日目（8.21）

	北沢長衛小屋	6:00 発
7:02	北沢橋	7:18 発
9:04	広河原山荘	
	計 4 本、2 時間 27 分	

この日は、広河原までロード歩き。明日の北岳に続く登りに備えた戦士の休息といったところです。

歩き初めてすぐにカモシカが。豚説、猪説もありましたが、あれはカモシカだったと思います。ロードは谷底の沢が美しかったです。すぐに広河原に到着しました。

■四日目（8.22）

	広河原山荘	5:02 発
8:16	二俣	8:28 発
11:40	小太郎尾根	12:05 発
12:47	北岳肩ノ小屋	
	計 9 本、5 時間 02 分	

これが、この合宿に一番根性を要する行程。肩の小屋まで登るだけです。始め樹林帯の中、何度か沢を渡ったり、崩壊地を横切ったりして二俣に到着。何と四日目にして初めての山でのアタックザックだったので、きつかったのでは。

二俣付近からは北岳パットレスが現れました。個人的には案外大きくなかった気がしますが…。

二俣からはさらに激しい急登になり、肩の小屋まで登りまくり。途中、僕がばててしまい、ペースが落ちてしまいました。無理せずに最初から、差し入れ等を持ってもらえば良かったと思います。

尾根からの仙丈・甲斐駒の姿は、とても懐かしく思えました。

■五日目（8.23）

	北岳肩ノ小屋	4:05 発
4:49	北岳	5:46 発
6:45	北岳山荘	6:45 発
8:02	中白根	8:17 発
9:14	間ノ岳	9:36 発
10:24	農鳥小屋	
	計 5 本、4 時間 04 分	

待望の北岳だ！皆の胸にもそんな思いがあったのでは。暗い中、ヘッドランプを頼りにガレガレの道を進みました。ガスが多少有り、景色は垣間見る程度。ピークの展望を心配したのですが、ピークに着いたときには、ガスはかなりとれて、御来光を十分に楽しめました。

ブロッケン現象は、みんなではしゃぎまくり。ストームは 4 人くらい。周りの写真を撮られていた方々等には、さぞ迷惑だったと思います。でも、ストームでは写真を撮ったり、音頭をとってくれる人もいたので、案外はたから見たら面白いのかもしれません。

ここからは、間の岳を過ぎ、農鳥小屋へ。旅の終わりも近い。

■六日目（8.24）

	農鳥小屋	4:00 発
4:56	西農鳥岳	5:05 発
5:45	農鳥岳	6:05 発
6:35	大門沢下降点	6:49 発
7:10	広河内岳	7:25 発
7:49	大門沢下降点	8:05 発
10:58	大門沢小屋	
	計 8 本、4 時間 39 分	

合宿最後の山だ。何しろ明日は下るだけです。農鳥岳へは、強風の中。寒いので休憩も短く。歩いている途中に御来光。北岳と違い、雲の隙間から幾筋もの光線が延びて神秘的でした。北岳御来光派と農鳥御来光派があったような無かったような。

それはさておき、農鳥、広河内と登って、大門沢小屋に下りました。長い長い下りで、皆疲れました。大門沢小屋では、最後の夜を思い思いに過ごしたことと思います。

■七日目（8.25）

	大門沢小屋	5:55 発
9:15	奈良田温泉	
	計 3 本、2 時間 48 分	

ついに合宿最終日。名残惜しい気持ちと下山できる嬉しさが半々だったのでは。今日は高度感のある吊り橋を数回渡りました。よく揺れるのでなかなか面白かったです。すぐにロードに出て奈良田温泉へ。温泉は最高！下山ビールも最高！これも山の醍醐味だな。と思いました。

初めに今年の夏合宿や錬成など、たくさんの先輩方や他大学の方が差し入れに来て頂き、大変嬉しく思いました。有り難う御座いました。また、御指導御鞭撻下さった先輩方にお礼申し上げます。

僕のパーティーは、天候にも恵まれ、全行程を無事に踏破できました。リーダーとして、とても嬉しく、幸運だったと思っています。また、素晴らしいパーティーだったと思います。しかしながら、P-men の一人が合宿に参加できなかったことが心残りではあります。来年の春合宿に参加し、いい思い出を作ってくれることを願います。**総コースタイム：54 本、6 泊 7 日、31 時間 02 分**

2.2.2　後藤 Party（山域：南アルプス白峰三山）

PL：後藤達彦（三年）

今年度の夏合宿の PL を務めさせて頂いた後藤と申します。僕のパーティーは 8 泊 9 日という予定の行程に加えて、三年生が一人しかいないということが大きなネックとなっていました。トレーニングをハードにすることや PL 養成を行うことで、夏合宿までには不安感は多少なりとも消すことができました。

PL は自分でしたが、先輩方、同期の執行部、P-mem の助けや協力がなければ合宿はなかったと思います。感謝しております。

では夏合宿結果報告を行いたいと思います。

■アプローチ（8.17）　合宿所を出発する。あいにくの雨である。湯田温泉駅までカッパを着て歩く。湯田温泉駅では山大、県大、工学部問わずたくさんの人が見送りにきてくださった。ありがとうございました。

小郡駅からの新幹線で早速厄介なことがおこった。帰省ラッシュにより新大阪駅まではほとんど立ちっぱなし。ザックを背負っている時間も長かった。指定席を買っていればと思うも後の祭り。新幹線を静岡で下りて東海道本線で富士、身延線で身延まで行き、身延でエッセンを作る。

タクシーに乗り、大樺沢バス停を目指す。タクシーの運転手によると明日からは晴れるだろうとのこと。ほんまかいなと思いつつも、悪い気はしない。広河原山荘に着いた時には八時をまわって真っ暗であった。

■一日目（8.18）**沈（雨）**

3:00	起床・エッセン
5:20	沈決定
11:30	エッセン
16:00	エッセン
19:00	就寝

この日はあいにくの雨。5:20 まで待機するも一向に回復の気配なし。いきなりの沈で不安モード。暇な時間をトランプなどして過ごす。

■二日目（8.19）**くもり（広河原山荘〜北岳肩ノ小屋）**

3:00	起床・エッセン	
5:28	広河原山荘出発	
6:13	大樺沢途中	6:27 発
8:56	大樺沢二俣	9:16 発
10:41	エッセン	11:13 発
11:41	白根御池小屋分岐過ぎ	11:55 発
12:53	北岳肩ノ小屋	
16:00	エッセン・天気図	
18:30	就寝	
	計 8 本、5 時間 20 分	

この日は合宿中一番きつい行程だった。大樺沢二俣までは沢沿いの登り。サブザックですいすい登る登山者が

恨めしい。大樺沢二俣には雪渓が残っており、ここで写真を撮ってもらった。二俣からはかなりの急登。途中、P-men の一人が頭痛を訴える。休憩を早めにとりながら進む。

北岳肩ノ小屋に着いても、P-men の頭痛はよくならなかった。おそらく高山病だろう。吐き気も訴えるようになる。水を飲ませるようにし、エッセンは食える量を食わせた。P-men の状態が回復しなければ明日下山、回復しても大事をとって沈とすることを二年生に告げた。

■三日目（8.20）沈

2:30	起床・エッセン	
11:30	エッセン	
16:00	エッセン天気図	
18:30	就寝	

起床した後、まっさきに高山病にかかっていた P-men の様子を伺う。昨日の苦しみかたが嘘のように回復していた。ただ大事をとってこの日は沈とした。再発しないか注意して見ていたが、合宿を続けても大丈夫だと判断した。

■四日目（8.21）沈（ガス）

2:30	起床・エッセン	
4:45	北岳肩ノ小屋出発	
5:28	北岳	7:15 発
8:00	北岳肩ノ小屋	

天候はくもりでこの日の行程は微妙。4:40 頃からすこしずつガスがなくなっていたこと、前日は 6:00 頃からガスが一気に消えて晴れたことを参考にして北岳に登った。

ピークは何も見えず、とても寒かった。ピークで待機するも、ガスは強くなるばかり。7:10、肩ノ小屋に引返すことを決断した。天候判断の難しさを痛感した一日だった。

■五日目（8.22）晴れ（北岳肩ノ小屋〜農鳥小屋）

2:30	起床・エッセン	
4:30	北岳肩ノ小屋出発	
5:20	北岳	5:35 発
6:46	北岳山荘	7:19 発
7:53	中白根	8:08 発
9:22	間ノ岳	9:34 発
10:38	農鳥小屋・エッセン	
16:00	エッセン・天気図	
18:30	就寝	
	計 6 本、4 時間 29 分	

この日は良く晴れていて、星がきれいだった。北岳のピークは前日とはうってかわって景色が抜群だった。甲斐駒、千丈、富士山が印象に残っている。ご来光を見て P-men も感激しているようでなによりだった。

北岳の下りはこわかった。道幅が狭くてガレているので、足をとられないように慎重に歩いた。北岳山荘から中白根までは写真で見た通りの雄大な景色が楽しめた。間ノ岳のピークに着いたころから巨大な積雲が迫っていたのでそうそうに農鳥小屋に下りた。

■六日目（8.23）晴れ（農鳥小屋〜熊ノ平小屋）

2:30	起床・エッセン	
4:30	農鳥小屋出発	
5:50	農鳥岳	6:13 発
6:43	西農鳥岳	6:55 発
7:28	農鳥小屋	8:09 発
10:08	三国平・エッセン	11:05 発
11:29	熊ノ平小屋	
16:00	エッセン・天気図	
19:00	就寝	
	計 7 本、4 時間 22 分	

この日は合宿初のサブザック行動であった。とにかく楽で景色も存分に楽しめた。風が強くて恐怖感はあったが、農鳥岳でのご来光はすばらしかった。

3000m 級の山でしか味わえない感動があった。農鳥小屋に戻り、アタックザックで熊ノ平小屋を目指す。三国平までの道はガレ場の連続で気の休まることがなかった。三国平に着いた時にどっと疲れがやってきた。

熊ノ平小屋はトイレがとてもきれいで、水場が近くていい小屋だった。間ノ岳を見ながらみんな達成感に浸ったことだろう。

■七日目（8.24）くもりのち晴れ（熊ノ平小屋〜雪投沢キャンプ場）

3:00	起床・エッセン	
5:00	熊ノ平小屋出発	
8:03	北荒川岳	8:23 発
8:56	雪投沢キャンプ場・エッセン	
16:00	エッセン・天気図	
19:00	就寝	
	計 5 本、2 時間 49 分	

この日の行程は樹林帯がほとんどで展望は少なかった。ただ、お花畑はきれいだったし、北荒川岳の崖の迫力はすごかった。足がすくみそうになった。

雪投沢キャンプ場は狭くて、水場がとても遠かった。目の前にそびえる塩見に登れることを祈りつつ眠りに就いた。

■八日目（8.25）ガスのち晴れ、風強し（雪投沢キャンプ場〜農鳥小屋）

2:00	起床・エッセン	
5:04	雪投沢キャンプ場出発	
5:34	北荒川岳	5:47 発
8:15	熊ノ平小屋	8:34 発
9:05	三国平・エッセン	9:58 発
10:32	三国沢の水場	10:47 発
11:38	三国平分岐	11:51 発
12:01	農鳥小屋	
16:00	天気図・エッセン	
19:00	就寝	
	計 8 本、4 時間 38 分	

ガスが塩見にかかり、加えて強風であった。ガスは待てばなんとかなるかもしれなかったが、強風はおさまる気配が無いので塩見岳登頂はあきらめる。沈の関係で奈良田への下山が決定した。

北荒川岳で数人が無念の思いをストームに。気持ちが途切れることが恐かったので、気を引き締めるようにいう。

■九日目（8.26）雨（農鳥小屋〜大門沢小屋）

3:00	起床・エッセン	
5:00	農鳥小屋出発	
6:31	農鳥岳	6:45 発
7:15	大門沢下降点	7:31 発
10:10	大門沢小屋・エッセン	
16:00	エッセン	
19:00	就寝	
	計 6 本、3 時間 56 分	

朝から軽く雨が降っており、農鳥岳もガスっているので慎重に行くように声を掛けるようにした。全員無事に帰ることだけ考えていた。

■十日目（8.27）雨（大門沢小屋〜奈良田バス停）

3:00	起床・エッセン	
5:08	大門沢小屋出発	
7:26	第一吊橋通	7:43 発
9:09	奈良田の里温泉	
9:45	奈良田バス停	
	計 6 本、3 時間 56 分	

大門沢小屋を出る時に共同装備をなくし、出発が遅れてしまった。気の緩みが P-men にでてきた証拠だろう。吊橋はスリリングで合宿の最後を飾るのにもってこいだった。

奈良田に下山した時は、安堵と達成感が同時にやってきた。奈良田温泉の定休日というおまけ付きで、西山温泉まで下山してから歩いた。

合宿を通しての反省点はいろいろあります。まず第一に高山病の知識が乏しかったということです。P-men が頭痛を訴えた時点で高山病を疑ってかかるべきでした。日本では高山病にはならないという先入観をもっていたために高山病に関して勉強することがなく、結果、P-men に対して適切な対応ができなかったのが事実です。今後、PL には高山病に対する知識を高めてもらいたいと思います。

また、合宿の後半にパーティーがすこしダレてきたことも反省点です。今後 PL になる人には、長期山行の後半はダレやすいということを意識して頑張ってもらいたいです。**総コースタイム：9 泊 10 日、45 本、28 時間 54 分（うちサブザック行動 2 時間 10 分）**

2.3　アフター・一年生合宿結果報告

2.3.1　アフター（山域：白馬岳）

PL：井出口謙三（二年）

今年の 8 月 31 日から 9 月 2 日にかけて北アルプス北部にてアフターを行いました。

■アプローチ・一日目（8.31）くもりのち雨

12:55	猿倉出発	
13:28	御殿場	13:40 発
13:59	白馬尻	
	計 2 本、52 分	

一年生に見送られながら松本を出発。この時同時に一年生合宿の成功を祈る。松本駅から白馬駅まで約 2 時間。白馬大雪渓に P-men 一人々々が思いを馳せていたことであろう。言うまでも無く自分自身がそのためにこの計画を立てたといっても過言ではない。

白馬駅に到着して、バスで猿倉へ。猿倉から今日のテン場白馬尻に到着。途中から雨が降り出し、明日の天候を気にしつつ眠りにつく。

■二日目（9.1）雨　昨日の夜から雨である。天気図、観天望気から判断するもやみそうな気配すらないため沈に決定。目前に雪渓を見ているというのに・・。

■三日目（9.2）　雨

10:40	白馬尻出発
11:24	猿倉
	計 1 本、44 分

すさまじい雷鳴が轟いている。はっきりいって雷に当たって、もしくは土石流に流されて死ぬんじゃないかと思ったぐらいである。テントに水が浸水し、ほとんどの装備は濡れていた。昨夜からの雷雨による睡眠不足と相まって Party 内に気だるさが漂う。今日も沈で明日の白馬岳ピストンにかけるしかない・・。

P-men に沈決定を告げ、エッセンを終えた頃、P-men の１人がトイレから帰ってきてこう言った「橋が無い」。小屋とテン場を結ぶ唯一の橋が取り外されていたのだ。しかもこのテン場に泊まっているのは我々 Party のみ。絶海の孤島に取り残されたわけである。

なんとか向こう岸の小屋の主人と会話を試みるが、雨と川の流音で何を言っているか聞き取れない。雨が小ぶりになってから行くと、川が増水したため、橋が流されないように、取り外したらしい。もう少し小ぶりになればまた取り付けるとのこと。

まずは一安心したが、明日もあまり晴れる見込みも無く、また橋を外されてしまうことも有り得るのでこの時点で下山を決定。テントをたたみ、パッキングをして小屋でお茶でも飲もうとすると小屋の主人から P-men 全員にコーヒーと茶菓子を貰い受けた。どうもこの雨で山行を中止して下山しようとしている我々を気遣ってくれたようだ。

「どうぞ」という主人の言葉が心に沁みた。小屋の主人と受付けのかわいい娘さんにお礼を言って、猿倉へと下った。途中小日向の湯という露天風呂に入ったが雨のせいか、心のせいかあまり温まった気がしなかった。そして白馬駅に到着しアフターは終りを告げた。

このアフターは自分にとってのなによりも強い教訓となりました。天候判断の難しさ、準備不足、あげればキリはないですが・・。

天気があまり良くないことは分かっていたので、出発の日程はずらすことはできたのですが、本部の関係、またあがたの森の管理組合による、立ち退き要求などもあり、せかされた形で出発したのが残念でありません。

しかしそれも今考えればどうにかできたようにも思えます。この経験を次に生かし、つぎこそは必ず成功させたいと思います。最後に・・白馬岳を登覇させてあげられませんでしたが、僕を信じてついてきてくれた P-men の皆さんとお世話になった先輩方、本当にありがとうございました。**総コースタイム：2 泊 3 日、3 本、1 時間 36 分**

2.3.2　一年生合宿（山域：美ヶ原）

責任者：園田純平（一年）

一年生合宿に行って来ました。予定コースの詳細は 2003 年度 OB 通信第一号で紹介しましたのでそちらをご覧下さい。今年の一年は 8 名ですが、オッチェン一人が残念ながら参加できず、P-men はオッチェン 4 名、メッチェン 2 名の計 7 名でした。

■アプローチ（8.30）くもり

10:10	あがたの森出発	
12:30	三城	12:35
13:10	広小場	
16:00	天気図・エッセン	
19:00	就寝	
	計 3 本、1 時間 06 分	

いろんなものとの戦いの場、あがたの森を後にしバスで一路美ヶ原へ。標高 2000m で差し入れのスナック菓子の袋はパンパンだというのにかなり開発されていて、ロッジや民家らしきものも普通にあります。

テン場・広小場までの道は最初ロード、途中から山道で、傾斜はあまりなく普段なら楽勝な道でしたが、野宿生活で落ちた体力と差し入れの重さがそれを地獄に変えます。

他の P-men がすたすた行く後ろをハアハア情けない息をしながらついていきました。突然木々が無くなり、明るい小さな草原に出ました。広小場に到着です。広小場は公園にようになっており、車道さえ入ってきています。近くの沢の冷水は天然の冷蔵庫として活用可能。これから最低三日間、ここにお世話になります。とりあえず酒を冷やしておきました。

■一日目（8.31）雨　雨の為沈。だらだらとあがたの森と大して変わらない一日を過ごしました。

■二日目（9.1）くもりのち晴れ

3:00	起床・エッセン	
5:00	出発	
5:23	いこいの広場	5:30
6:07	桜清水キャンプ場	6:18
7:31	王ガ鼻	7:45
8:10	王ガ頭	8:50
9:25	塩くれ場	9:45
10:20	茶臼山・エッセン	11:30
12:18	広小場	
16:00	天気図・エッセン	
20:00	就寝	
	計 8 本、4 時間 26 分	

ガスが出てはいましたが、行程一日目。覚悟していた石切り場からの急登は意外とやさしく、すいすい登れま

した。登り切ると美ヶ原最大のビューポイント、王ガ鼻でしたが、王ガ鼻はガスの中でした。悔しさをストームにぶつけると、思いが届いたのか一瞬ガスが切れ、下界を覗き見ることができました。

再び視界がガスに覆われたところで王ガ頭に向かいます。王ガ頭への道は晴れていれば美ヶ原の全体が一望できますが、このガスでは何も見えません。しかし何が出てくるか分からない、そんな面白さもありガス中の山行もいいものだ、そう思い始めたときに突然巨大なアンテナが姿を現しました。

王ガ頭名物（？）の巨大アンテナ群です。コース紹介のとき私はここを褒め称える方向で行くと書きましたが、確かにこれは不気味です。特にこのガスが変な雰囲気を盛り上げています。王ガ頭は美ヶ原最高地点ですが、アンテナのほかにホテルも立ち、「山」という感じは全くありません。とりあえず P-men はここのホテルでみやげ物を買い、次へと向かいます。

ここからの道はしばらく牧場の中の道を進みます。両脇では牛が黙々と草を食んでいます。のどかな、静かな牧場の朝です。この頃から徐々にガスが晴れ美ヶ原の全体像が見渡せるようになって来ました。どこまでも青々とした草原が広がります。私だけかもしれませんが、なんだか無性に牛乳が飲みたくなる、そんな光景です。はるか後方には先ほどの王ガ鼻や王ガ頭が見えます。今行けば眺望も最高だったでしょう。

塩くれ場付近から牧柵の中に入り、牧場内を歩きます。牧場内ですので、もちろん牛の糞が落ちています、しかも大量に。メッチェンの一人は眼を皿のようにして足下を見つめながら歩いていたのでいつのまにか最後尾まで下がってきていました。私は踏んだような気がします。

茶臼山に到着すると空は真っ青でとても気持ちがよかったです。ここで昼エッセンにしました。その後の青空に向かってのストームは爽快でした。

■三日目（9.2）くもりのち晴れ

4:00	起床・エッセン	
6:00	出発	
7:13	塩くれ場	7:40
7:50	美しの塔	7:55
8:10	山本小屋	
	計 4 本、1 時間 23 分	

行程二日目。やはり朝はガスが出ていました。テントを撤収し百曲がりを登ります。鳳翩の途中もくねくねしていますが、百曲がりというだけあってそれがずっと続きます。登りきると前日の塩くれ場です。ここで P-men の一人が足を痛めていたのが悪化。エスケープを決定しました。

焼山滝には下らずに山本小屋に向かいます。途中美しの塔で記念撮影をし、山本小屋到着。ここで一年生合宿は終了しました。

他にもいろいろなことがあった合宿でしたが、本当にいろいろなことがあった合宿でしたが、特に最後の最後でいろいろあった合宿でしたが、それも今では笑いの種です。むしろ最初から笑えました。

この合宿をするに当たりたくさんの人に、特に先輩方には本当にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。**総コースタイム：2 泊 3 日、15 本、6 時間 55 分**

2.4　春合宿コース紹介

2.4.1　霧島・九重 Party

PL：生田将吾（二年）

このたび、春合宿をたてることになりました、経済学部経済学科二年の生田です。僕の Party は霧島山群と九重山群の両火山帯を行くコースとなります。両山群とも九州ということで、普段なかなか行けない九州の山を味わえるのではないでしょうか。

先に訪れる霧島山群では、一日目、えびの高原から韓国岳、獅子戸岳、新燃岳、中岳と縦走し、高千穂河原に、二日目はそこから高千穂峰をピストンします。どの山も景観は抜群で東西南北すべてを見渡すことができます。また、火山といえば噴煙が思い浮かびます通り、新燃岳の火口からは噴煙が立ち上っています。そして、南の遠方には桜島の噴煙も見え、間近でも間遠でも火山活動の一端を楽しむことができるでしょう。

後に訪れる九重山群では、一日目、長者原から法華院温泉山荘へ登り、平治岳をピストン、そらからは法華院温泉山荘と坊ガヅルを拠点として、二日目、白口岳、稲星山、久住山、天狗ガ城、中岳、星生山に行き、三日目に三俣山をピストン。

そして四日目に大船山、北大船山に登って七里田温泉に下り合宿終了となります。九重山群は四季折々の景観に優れており、今回目にするのは、冬から春の変わり目となります。木々、草花が芽吹きはじめ、春の香りがすると同時に霧氷という冬がまだ覗かれる、そんな時季に僕たちは訪れることになるでしょう。

山頂に立てば九重全土が見渡せ、南の方には祖母山も目に入ります。こちらも、硫黄山から噴煙が立ち上り活火山を思わせます。また、九重山の裾野は広大な高原を

なしており、女性的な柔らかな味のある草原は人を引きつけるに十分な魅力を持っています。高原の美しさを肌で感じることができるでしょう。

両山群にいえることですが、火山湖が点在するのも特徴です。大小様々、色様々に目に映り、楽しませてくれることでしょう。そしてもう一つ、火山といえば温泉です。両山群の数ある温泉のうちいくつかに入ってみようと思います。

以上が今回の春合宿のコース紹介となります。PL としてまだまだ至らない部分もありますが、P-men が充実した時間を過ごせるよう尽力していきたいと思います。

2.4.2　**西表島** Party

PL：松下譲司（二年）

この度、2004 年の春合宿で PL をやることになりました経済学部経営学科二回生二年の松下譲司です。今回の春合宿で僕のパーティーは西表島に行きます。

西表島は東洋のアマゾンとも呼ばれているように、ヒカゲヘゴという巨大のシダの木やヤエヤマヤシ、日本最大のマングローブ林、など様々な動植物が見られます。

コースはまず西表横断道というジャングルの横断から始まります。西表横断道では、マヤグスクの滝や、「神が座する所」という意味があるカンピレーの滝、日本の滝 100 選にも選ばれているマリウドの滝を見ることができ、西表を存分に体感することができると思います。

ジャングルを抜けたら、遊覧船で川を渡ります。浦内橋からロードを歩き、白浜まで向かいます。ここから船でウダラ川河口という所に向かい、再びジャングルの中を歩いていきます。ジャングルを抜ければ美しい海が広がる浜に出ます。ここからは南風見田の浜という所まで海岸線を歩いていきます。リーフも歩きます。南風見田の浜からはロードを歩き、合宿の終了地の大原に着きます。

最後に、今回の合宿を立てるにあたり、先輩方にはたくさんのアドバイスをいただきました。本当にありがとうございます。またこれからもアドバイスをいただければ幸いです。

第 3 章

現役部員近況報告 —工学部編—

3.1 近況報告

工学部代表：河田優（二年）

今年は現役が二年 1 名ということで、日々のトレーニングは四年生 4 名、在学 OB 1 名の計 5 名の先輩方に手伝ってもらい活動を行っています。

今年の夏合宿は先輩方が研究室などで忙しいということもあり、本部の後藤さん Party に入り南アルプスに行ってきました。残念ながら悪天候などによって沈が続き、コースカットとなり全工程を行くことは出来ませんでした。

11 月の 2、3 日には工学部の先輩方と雪上訓練の下見のために大山へ行くことができ、コース状況の確認とともに紅葉を楽しんできました。

これからの行事は、本部の学長杯争奪駅伝大会と春合宿です。今年は本部に一年生がたくさん入ったため駅伝は 3 チーム作ることになり、その余りの穴埋めのために工学部の 2、4 年生が出場することになりました。そのため、今（11 月現在）は駅伝に向けてのトレーニングも行っています。春合宿は夏合宿と同じく本部に連れていってもらうことになり、生田 Party で九重と霧島に行くことが決まりました。

今年は工学部の部員不足ということで本部にいろいろとお世話になっていますが、来年は後輩が 5 人も来るので、今年できなかった 80Km 耐久徒歩など工学部での行事が行えるようになると思います。

これから 12 月に入りますます寒くなっていきますが、風邪などを引かないよう健康に気を付け、駅伝大会、春合宿に向けての体力づくりに励んでいきたいと思います。

3.2 夏合宿結果報告

今年度の工学部夏合宿は本部と合同で行われました。本部の報告をご覧下さい。

3.3 80 Km 耐久徒歩について

工学部員：小松敬幸（四年）

ここ数年、毎年開催されていた 80km 耐久徒歩ですが、今年は行わないことになりました。その理由としては、今年、工学部の部員が少ないことが挙げられます。

現在、工学部の部員は 6 人いるのですが、2 回生 1 人、後は皆 4 回生以上という構成となっています。そして、4 回生以上は定期的な活動が難しい状況にあります。このため、80km 耐久徒歩の執行部を構成することができません。もし、今年 80km 耐久徒歩を開催した場合、実質 2 回生 1 人に仕事を任せることになり、大きな負担をかけてしまうことになると思います。よって、今年の 80km 耐久徒歩は中止となったことをここに報告いたします。

3.4 春合宿コース紹介

今年度の春合宿は本部と合同で行われます。本部のコース紹介をご覧ください。

第 4 章

近時辺々

読者の皆様からの投稿コーナーです。内容を問わずお便りを頂ければ取り上げていきますので、ぜひお寄せください。

4.1 列島最南端紀行 — 木山克彦（S.42 年卒）—

■2003.8.24　福岡空港で買った弁当を手に 120 人乗りの機内に乗り込む。愈々日本の最南端への旅路の始まりである。三十年位前に石垣島出身のお医者さんから波照間島の海の話を伺って、その光景に憧れ、行ってみたく思っていた処、今回の機会を得たのです。

最近、女房と子供を連れての旅行は、今春イラク戦争と SARS 流行の中を突いて一週間ばかり行ったタイ、カンボジアに次いでのことである。

急に降って沸いたような話だったが、計画の途中で長野浅芳君、田中秀平君から当地に農学部の後輩で、現在、「タウンマネージメント石垣」という会社の専務を務めている人物の話を聞いたのです。彼の研究室の先輩に当たり、恩師でもある田中秀平君は昨年末に石垣島を訪ね、周辺の島々の訪問時に彼と会っている。

この人物は石田正夫君と言う人だが、田中秀平君の計らいで、出発 10 日前には石田君とのメール交換にまで漕ぎ着けられました。15 年も後輩であるので面識も無いのですが、この際大いに甘えさせて貰うことにしました。24 日は日曜日で彼にとっては貴重な休日であるにも拘わらず、石垣空港に着いたら直ちに携帯に電話を掛ける約束をしていました。

フライトは二時間少々、何の障害も無く石垣空港に到着。照り付ける太陽光線は内地のそれとは全く違い、「ぎんぎらぎん」である。早速電話し、宿泊先の全日空ホテルのロビーで落ち合うことに成った。今回の旅行は全日空のパックですから、このホテルに三泊する予定になっており、日替わりメニューで近在の地（島）を訪問することになっている。

2 時過ぎに彼と合流し、早速彼の車で島内を走り廻って貰った。市街地を外れると信号は滅多に無く、舗装道路は大変良い。このように整備されたのは復帰後の特別な国家的政策のお陰らしい。車中では島民の暮しの事、琉球松の事、マングローブの事、最近の島の経済事情など、幅広く説明を受けながら、海の大変綺麗な川平地区に着く。

此処はサンゴ礁を観賞できる船などがあり、海の色は紺碧の限りである。照り付ける太陽光線の元、心地よく海岸の砂浜を歩いた後、近くの黒真珠の販売店に寄り、目の保養をした上、気に入った物を女房が購入。このお店の御曹司のところに石田君の妹さんが嫁いでいるとの事でした。その関係で半額にして貰った様です。5 万位にして貰ったのかな？

帰りの車窓から八重山椰子の群生地や、賑わっている海水浴場、別荘地、三面もあるサッカー場などの案内を受け、島で最高地（540m 位？）の「於茂登山」の脇を貫通している於茂登トンネルを抜けて市街地に入りホテルへ到着。石田君と冷たい物を飲みながら、明後日の夕方再度合流し、食事を共にすることを約束し、今日の日程を消化した。

■2003.8.25　石垣港 8 時半発の船で波照間島に向けて出港。自分にとって「波照間」という字は、「果てる」という響きと共鳴し、何故か「途轍もない地の果ての哀愁」に近いものを感じていた処でも有ったし、「波の間に太陽や月が照る」という幻想的な光景も想像していた。

高速挺での快適な船旅で、途中西表島、黒島、竹富島などを横目に水上をすっ飛んで行く。50km 少々の距離ですから、平均時速 25 ノットとして一時間とちょっとの時間である。愈々日本最南端の島、波照間島である。なんだか胸騒ぎがする。東シナ海（と太平洋の両方）に突出したあの綺麗な断崖絶壁と、どこまでも透き通った紺碧の海が見られるのである。天気は最高。

波照間島の人口は 600 人に満たないし、島の周囲 14.8km 程度。歴史を紐解くと琉球（沖縄）は薩摩（鹿児島）から人頭税なる高額の税を押し付けられ、その後は米軍駐留という抑圧の歴史が脈々とある。内地の我々には計り知れない程の複雑な心境なのだろうが、哀愁深

い島歌を歌う中でこれらを昇華しているように感じるのは一人自分だけだろうか？

港のすぐ近くには、当時この税を徴収するために使われた場所があり、石垣を積み上げた壁にカヤブキの小屋が今でも残っているし、悲惨な死を遂げた島民の碑が物寂しく立っている。海抜は最高地点で 70m しかなく、最近まで島内では一箇所だけの井戸に頼り、その痕跡が鬱蒼とした畑の端のほうに残っていた。

近年、海水を汲み上げ、真水に処理する装置が出来あがり、島民に供給していると聞く。海中にパイプを引き、石垣本島から持ってくる構想も持ち上がっているが、25 億という予算が必要で、暗礁に乗り上げているとか。

勿論これと言った産業は無く、サトウキビが取れる程度ですから、生活は単調そのもの。派出所はあるが、ここのお巡りさんは愛知県から来た人で、何時も釣りをして過ごしているそうです。余程この島を気に入って赴任を希望したのでしょう。

サトウキビ畑を暫く走って、最南端の碑がある海岸に出た。海岸といっても切り立った断崖絶壁であり、荒い潮が吹き付けている。あぁ愈々来た。この光景を見たいと思って以来、三十年の月日が経っている。此の地には日本への復帰を記念し、各都道府県の石を集めて順序良く通路のそばに埋め込んであり、「沖縄は他の都道府県と同じように日本だよ」との意味合いの如く連なって配置されている。

アメリカの占領下にあった時代の辛い思いを、このような形で表現した当地の人の民族意識を感じ取れるところでもある。又、北海道の最北端には碑が有るのに、此処の最南端には何も無いではないか、と言う不憫な思いから、奇特な人が自費で最南端の石碑を立てたとの説明を聞いた。こんな話を聞いているうちに、何故か辛い思いを感じる自分であった。

南十字星が見えることも有って、海岸線には天体観測所が建立されていた。この人工的な建物は此処には相応しくないので、遠慮してほしいところである。周囲には家や街灯は全く無く、月の明りが無い時は真っ暗闇で、星の観測には最高の条件の様である。この地での思いは尽きないが、時間の都合もあって車に戻る。

島を去る前にこの島で唯一の土産物店「モンパの木」に立ち寄る。主人は大阪、奥さんは静岡の出身だが、此処に移り住んだようです。決して快適とは思えないような民家風の家がジャングルの中に建てられていた。此処での生活基盤である。住民の日常生活に必要な物資は、住民が当番制で遣り繰りしている島民共同の販売所があるが、開いているのは午前中と、午後は三時か四時頃からで、それ以外は閉まっている。

この地は強いアルカリ土壌であり、サトウキビは OK だが、パインはアルカリに弱く栽培は出来ない。又、このアルカリ土壌のため、ハブも住み着けないそうです。そういう意味では、石垣島、西表島などの他の島と比べ自然環境を異にしている。又、他の島が観光地としての恩恵を受けながら生活しているのに比べ、この波照間島の人は、従来の生活を維持したいというか、欲が無いというか、観光地化が進み汚されることを嫌うのか、この地に純粋に誇りを持っているのだろうか、観光地として開かれて行くことを余り歓迎していないそうです。

そんな島民の意識が何とも言えない良さなのである。人工的な文化に犯されること無く、大自然の中に生かされている生活を満喫できる雰囲気であり、当地の人の底知れぬ強さに触れた気がしました。

港の近くに民宿があり、此処で昼食を取る。幕の内風のお弁当でしたが、内容からの想像だが石垣島より持ち込みのものでしょう。急いで食べて、船は波照間島から次の目的地である西表島に向けて出港。

半時間程度で西表島の大原港に到着。西表島は多くの観光客が出入りする為か、港の雰囲気から、人の応対まで垢抜けしているというか、野性的な魅力を持つ波照間島とは趣を異にする。

面積では石垣島をも遥かに凌ぎ、近在の島々の中では最大であるが、平地が少なくジャングルに近い森林がその多くを占めており、人口は 2000 人程度で、車も少なく、交通信号は児童の教育上の必要性から一箇所だけ設置してあり、信号の何たるかを教えようとの配慮の様である。

この島は一般的な観光と言うより、寧ろ原生林の生い茂る中で生命現象を営む動植物の面白さを求めるものであろう。今回は時間の関係もあって、おざなりな観光にしかなり得なかったが、テントでも担いで時間に縛られる事無く彷徨う旅に格好の島である。

個人的な理由かも知れぬが、観光バスの運転手さんも内地のそれと変わらないほど垢抜けしているし、サービス精神旺盛である。普通、観光地はすれていると言うか、いやな思いをするものだがこれが全く無い。島に共通しているところは純情な親切心が旺盛であることである。

在り来りの説明を受けた後、バスを降りて周囲 2km の由布島へと牛車に乗り込む。遠浅の海をのんびりと牛車は進む。牛車を操るオッちゃんが蛇皮線を引きながらアンリャユンタを歌い出す。此れが又何とも侘しい響きである。来る日も来る日も 10〜14 人の客を乗せて、一日に何回も何回も同じように車を引っ張る牛は堪ったも

のではない、と同情の気持ちが沸々と沸いてくる。

由布島は島全体がブーゲンビリアや多くの椰子が生い茂る亜熱帯植物園のようなもので、ジャングル風である。扁平な島で、標高差も無く、周囲は海だから、風も無く途轍もなく暑かった。地下 1m 掘れば海水が出るそうです。

牛車を降りた時、多くのカメラを向けられ、又、別の場所でも勝手に観光客の写真を撮ろうとする連中がいて、島を巡って帰る頃にはチャンと仕上げて売りつける。一枚 1000 円。この辺りの要領はシンガポールとか、セーヌ川の畔のそれと全く同じである。此処では観光化の波に晒されて付属的に発生する嫌らしい商業主義、其れに伴う押し売り的な行動など、嫌な思いを感じながらバスに乗り込み、次の目的地に向けて発車。

干満の時刻の関係で水深確保のため行程上最後になったが、仲間川の河口から船に乗り、川を遡上する途中マングローブの密生林を見ながら、樹齢 400 年とも言われる珍しいサキシマスオウノキの巨木を見にゆく。

このサキシマスオウノキとは何とも言えぬ面白い根を持った植物です。ガイドよりマングローブとは特定の植物の名称ではなく、このような地に生える水生植物の総称であると教わる。吸収根、支柱根などの説明を聞くうちに、思わず高校の生物の時間を思い出した。

此の島にはイリオモテヤマネコや何とか言う珍しいカメ、奇妙な貝、大きいシジミ貝など他の島には生息していない珍奇な動植物が多く、この島が昔は中国大陸と繋がっていた事を証明するものも多い。近隣の島とは違った土壌の成り立ちがあり、雨水が貯留され易く豊富であるために、いろんな興味ある植物が有ると聞くが、時間が許さずこれらの探索は次回の訪問時に譲った次第です。

資料によると嘗て西表島には炭鉱があった。この事実から見ても、この島がサンゴ礁から出来た物ではなく、他の島々との違いをはっきりと示している。石炭を発見したのは 150 年前、ペリーが率いる地質調査員で、昭和初期まで活況を呈した。沖縄本島、本州、台湾から労働者が集まったようだが、甘い文句とは裏腹に過酷な労働とマラリアの蔓延、劣悪な労働環境から多くの労働者が命を落とすことになった。戦争激化で採掘中止、敗戦で炭鉱会社は崩壊したとある。まだ多くの興味ある現象に引かれたが、時間も無く大原港より石垣港へ向けて帰途に着く。

石垣港着は夕方になり、夕食をとってホテルに帰ることにした。ふらふらと通りを物色し、「ここぞ」と思われるところで地元の郷土料理に舌鼓を打つ。5 時から 7 時まではキリン淡麗がジョッキ一杯 50 円である。結構な量があるジョッキだから此れは超安価。キリンラガーは無く、エビスもアサヒスーパードライも無い。地元のオリオンビールは有ったが、昨晩呑んだ感覚では一寸気の抜けた感じなので、超安価のキリン淡麗にする。7 時までならいくら飲んでも一杯 50 円、これドウナッテルノ？

後から聞いた話だが、地元資本として経営されてきたオリオンビールは、今はアサヒビールが資本を拠出して経営参画しているらしい。ゴーヤチャンプルーを始め色々な郷土料理を戴いたが、元来料理の名前は憶えられない方なので、数日経った今となっては名前が一切出てこない。モズクの天婦羅があったが、たまねぎ、にんじんを取り込んで揚げたものである。刺身はやや大味。ひとしきり食べて、近くの商店街を覗き、チンスコウや、地元ならではの民芸品等、土産物を買ってホテルに帰る。

■2003.8.26　午前中はホテルに隣接する海岸でダイビングに挑戦する。人生長き中でいろんな事をしてきたが、器具を付けての「潜り」は初めてだ。初めに一通り教わり、誘導されながら潜る。なんてことは無い。

サンゴ、熱帯魚、珍しい生き物など海中散歩をしたが、水深が 3〜5m 程度の処でのことなので物足らなく、不完全燃焼で終わる。マンタにも会えず。中学校のときからサザエ採りなどで 5〜7m 位の素潜りはしてきたので、この深さでは少々寂しい思いをする。折角高度な器具を付けての潜りなのだから、もっと深く潜って見たかったものです。

午後からオプションとは別に人口約 3000 名の竹富島に渡る。豪華な高速艇である。速い、速い。あっという間に着く。

この島では三人とも運転免許証を持ってきていたので、バイクを三台レンタルし、島内を回る。この島の家屋は最も八重山らしく島固有の造りである。夫々の家にはシーサーが在り、確りと家を守っている。小さい島なので、ちょっと走れば直ぐに反対側の海岸に出る。案内に従い星砂を捜す。

この島は平坦だし、家の周囲は石垣を張り巡らしてあり、道は特定の処だけが舗装されている程度で、太陽光線をしっかり吸収した大地や石垣からの輻射熱は大変なもので、暑さ事の他酷く、出るわ、出るわ、汗が、ワンサと出る。一時間でちょうど一周できたので、800 円 × 3 台の 2400 円を払って島巡りを終了。

今晩は最終日なので石田君と夕食を共に採ることになっており、早めに引き上げることにした。余りの暑さでグショグショになったシャツを着替えに一旦ホテルに帰り、6 時過ぎに彼の務め先のある、公設市場近くの

ビルで合流した。彼の案内で昨日とは一味違った郷土料理店に行く。イカ墨、石垣牛のタタキ、何とかチャンプルー、何とか、何とかなど、珍しく且つ大変おいしい物ばかりであった。やはり地元に精通している人は行く所が違うねぇ。イカ墨の残りで焼き飯を戴いたが、これは最高に美味かったね。

二軒目は親父さんが CD も出しているという民謡酒場に行く。島唄（民謡）の大合唱で、地元の人、滋賀の人、神戸の人などを巻き込み、大変な繁盛振りでした。後になって気がついたが、ガイドブックに此処の親父さんの写真が載っていた。10 時過ぎには退散する。

■2003.8.27　今日の午前中はフリーにしていたので、レンタカーで石垣島を走ることにした。8 時 15 分発、4 時間の予約で 8000 円。初日に石田君に案内して貰った地区を除いて、島の西側を目指し、唐人墓の方面に向かって進む。

道路事情は解らないので適当に行き、途中から時間を見計らって、飛行機の時刻に間に合うように引き返す予定だったが、思いもよらず車は少なく信号は無く、ぐんぐんと距離が稼げる。それじゃ、この際行ってしまえ、と御神崎を目指す。この岬は最も西北に突き出た半島にあるが、大地に生える植物の緑、茶色の岩石、コバルト色の海とで、三者の調和が良く取れて大変気持ちの良いところであった。海難事故の碑が痛ましく立っていて、亡くなった人の刻印が辛さを誘う。

まだまだ時間が残っており、此処から一気に帰ったら時間を持て余す。来た道を一寸引き返し、元名蔵から島の中央部に向かって進み、島の東側の海岸線に出て此処から北上し、玉取崎を通り過ぎ、伊原間の手前から西北に向かい北側の海岸線にでる。此処から西南に進路を変えて、海岸線を下り富野より一気に石垣市内を目指して帰った。途中には農村地帯も有ってサトウキビ以外に欄の栽培光景も見られ、機械化も相当に進んでいた。

暑いのでアイスクリームを買おうと探すがお店は全く無い。石垣市に着きコーヒーを飲む為、近くのマックスバリューに寄る。石垣市にもマックスバリューが進出し、地元企業に多大の影響を与えていると聞いている。そうこうする内にちょうど良い時間になり、空港にレンタカーを乗り捨て、近くの石垣屋で石垣牛の焼肉定食を採り、予定の飛行機で福岡に。

4 日間の駆け足の旅でしたが、無駄な時間も無いほど密度の濃い旅でした。石田君には本当にお世話になりました。もう一度西表島と、今回は行けなかった与那国島をセットにして、ゆっくりと行ってみたい処です。波照間島の最南端の断崖絶壁で星を見ながら、シュラフに包まりむにゃむにゃと寝るのも良いだろうなぁ。

4.2　祖母山登山 — sakima（H.13 年卒）—

福岡県在住の二つ上の O 方先輩に誘われ、同期の T 部君、S 伯君そして僕という四人で祖母山に登る運びとなった。祖母なんて名前からして大した山じゃないだろうと高を括る僕。もちろんトレーニングなんて一切しなかった。山をなめていました。

■2003.9.13　13 時過ぎに T 部君の自動車で山口を出発。なぜか同期の S 村女史も同乗していた。小倉まで一緒に行くんだと。彼女を小倉駅まで送って行ったため、田舎者の僕達は小倉で迷子になった。ちくしょう。

他にもいろいろな場所で道に迷いつつ、23 時頃やっとのことで登山口のある神原（こうばる）に到着。O 方先輩とはここで落ち合う約束。先輩はまだ到着していないようだ。

キャンプ場があるというので行ってみる。S 伯君の操る車は明らかにまともでない道を走る。急坂な上に道幅が車幅すれすれなんである。舗装もされているとは言い難い。いつ落ちてもおかしくない。こんなところでこんな二人と死ぬなんてごめんだと僕は思った。

そうこうしている内に、寂れたキャンプ場らしき場所に無事到着。人の気配は全くなく、水も出ないし山のまっただ中。不気味だ。結局引き返して下の駐車場で泊まることに。

駐車場入口はちょっと分かりにくい場所にあったので、道路の道端に 3 人座ってロウソクを立て、ビール（発泡酒ですが）を飲みながら O 方先輩を待つ。30 分くらいして O 方先輩到着。駐車場にテントを立てる。

久しぶりに会う O 方先輩と談笑しながら、発泡酒の続きを飲む。そして午前 2 時過ぎに就寝。

■2003.9.14　山登りの日。8 時くらいに起床。朝食にスパゲティの麺を茹で、レトルトのミートソースをかけて食べる。ちょっと量が多かった。誰だよこんなに茹でたヤツは。僕か。

テントを撤収して出発。登山口ギリギリの駐車場まで車で乗り付け、一応登山届けに記入して山行開始。テクテクと歩いていると S 伯君の携帯が鳴る。電話をしながら登る彼はあとでみんなから批判を浴びていた。で、20 分程すると五合目小屋に到着。立派な無人小屋。いざとなったらここに住んでもいいなと思った。

小屋を過ぎたあたりからいよいよ傾斜が厳しくなる。しっ、小生はもういっぱいいっぱいでやんす！朝食べたスパゲティが口に再来することもしばしば。一口で二度美味しいとはまさにこのこと。ああうれしいなあ！

本気で吐きそうだったので、僕はみんなに頼み込んで一本とらせてもらった。S 伯君は「まだ 20 分も経ってない」などと不満がっていたが、強がっていたのは見え

見えである。本当は彼もキツかったに違いない。心の中では僕に感謝していたのだと思うことにしよう。

登りのことは思い出したくないのでこの辺にして、いつのまにか山頂。久しぶりに頑張ったと言える。でもヘロヘロ。おぇ。

快晴であったので遠く北に九重連山、南に霧島連峰、東北に阿蘇山が見える。久住と阿蘇は登ったことがある（阿蘇は自転車で登った）のでなんだかうれしかった。それに祖母・傾の山塊はどっしりと大きく、まるで南アルプスみたいだ。登りもアルプス並みに辛かったし。でもそれだけの価値はあった。山頂の空気を楽しんでいると、疲れも癒えていた。この瞬間が一番好きだ。

一息ついたところで、昼食のカップラーメンを食べる。その後は一時間ほどごろごろ昼寝などをする。ごろごろ。

そろそろ帰らねばと、午後 2 時半頃から下山開始。滑べりやすい土だし、急傾斜なので下山はしんどかった。こともあろうにジョギングシューズを履いて来ていた T 部君は足がプルプル震えていたのでおかしかった。彼を見ているといつも心が和む。

しかしトレーニング好きな彼のこと、T 部君的には自らの足を「鍛えて」いたのかもしれない。これからは厳冬期登山であろうともぜひ安っぽい（ホームセンターで売っているような）ジョギングシューズで挑んで、足を鍛えまくって（そしてプルプルさせまくって）欲しい。そんな彼のことを思ってか、先頭の僕はついついペースを荒げてしまった。

下山後、別府へ移動。200 円の温泉に入る。O 方さんは白っぽく濁った温泉に入りたかったようだが、その 200 円温泉はなんだか泥水のような色をしていてゲンナリ。これが本場たる結縁か。

温泉を出てから別府の街を徘徊。関サバなどを食した。S 伯は刺身がダメということで食べていなかった。不憫。

その後海辺の公園にテントを無断設営。就寝。しかし地面が熱くてなかなか寝つけない。さすが温泉の街。

■2003.9.15　朝 8 時、O 方さんと別れ、僕達は山口へ帰る。S 伯と T 部が交替で運転していたようだが、普通免許を持っていない僕は後部座席で寝ていた。免許を持っていなくて本当によかった（こんなことを考えるようなヤツはこの先なにをやってもダメだ）。

その他

OB 会の名称と図案募集中

OB 会の名称と図案（ワッペン等に利用）を募集しています。多数の力作をお待ちしています。採用者には豪華賞品を贈りますので、奮ってご応募ください。応募は事務局または会長、副会長宛にお願いいたします。

編集後記

2003 年 OB 通信第二号をお届けいたします。卒業論文の練習を兼ね、今回は組版(くみはん)ソフトの LaTeX 2_ε を使って編集してみました。いささか堅苦しい体裁になりましたが、ワープロソフトに比べ編集作業は大変軽減しました。調子に乗って二段組にしてみたのですが、読み辛かったでしょうか。

今回の OB 通信は通巻第 29 号といたしました。これは事務局の資料に残っている OB 通信を数え上げたものです。

ところで、私もついに今年度いっぱいで山口を離れることとなりました。六年間を過ごした山口市。もう部屋の窓から東西鳳翩山を眺めることもなく、夕方に現役部員が発しているトレーニングのかけ声を聞くこともないのかと思うと寂しくなります。

山口に来たばかりとき、私を温かく迎え入れてくれ、様々なことを教えてくれたのは他ならぬワンダーフォーゲル部でした。そして OB 会においてはたくさんの勉強をさせていただきました。ワンゲルに入部したおかげで本当に充実した大学生活を送ることができ、ただただ感謝するばかりです。

これからの山口大学ワンダーフォーゲル部、山口大学ワンダーフォーゲル部 OB 会のご発展を心よりお祈りいたします。